

## 今どきハイデガーを読むということ

——公共性の絶え間ない構造転換の中で——

高田 珠樹 (大阪大学)

### はじめに

今回のフォーラム全体の題目が広がりをもったテーマですので、この報告では、研究発表としてハイデガーの作品のある箇所について自分の読み方や解釈を披露したり、特定の術語や概念の意味するところを吟味して、ハイデガー解釈の新しい視点を提示することを目指すというのではなく、常日頃、自分がハイデガーに関連して漠然と考えていることを纏めながら、今日、私たちがハイデガーを読む意義などについて議論するきっかけとなりうるような話題を提供したいと考えます。あくまで漠然と考えていることであり、おそらく、このような機会を頂戴しなければ、立ち入って考えることすらないような話ではありますが、フォーラムという形式で、関心を共有する多くの人が集まるせつかくの機会ですから、あえて曖昧な主題について一緒に考えて討議していただく糸口となれば、と思います。

ハイデガーを公共性という概念に関連させて論じようとするとき、そこには、大学で思想や哲学の研究に従事する者が社会的に必ずしもあまり認知されなくなってきた時代に自分たちは生きている、そういう時代にあってハイデガーを学ぶ意義をあらためて再確認しておきたいという願いが託されているように思います。単に私の印象にすぎないかもしれませんが、総じて日本では、もともとハイデガーを研究してきた人たちの中では生命倫理や情報倫理といった、ここ 20 年あまりのあいだに台頭してきた応用倫理の諸分野に積極的に係わる人は比較的少ない、そういう中で、公共性をめぐる議論の中にも、それについてハイデガーを研究する立場から何か語る余地がないか、確認しておきたい、という意思があるのではないのでしょうか。

私自身は、大学に教員として職を得ているものの、長く外国語を専攻する学生たちを相手にドイツ語やドイツの現代の社会や文化の動向を主題とする授業を担当してきました。そして現在も授業の多くは、おおむねその枠組みの中で行なっています。と同時に、希望すれば、ドイツ語専攻という枠の中で哲学や現代思想に関連する授業を一つくらい開講してもよい、ハイデガーが多少とも話題になる授業も持ちたければ持つてよい、という、言わば自分とハイデガーとの関係について、あまり窮屈に考える必要のない立場にいました。このため、少々不謹慎な物言いになりますが、私にとって、ハイデガーを読む、とりわけ大学で学部の学生たちを相手にハイデガーを読む、ということについては、いくらか切迫感が欠けているかもしれません。少なくとも、それが彼らの将来の職業の選択などに何らかの影響を及ぼしうる、履修している学生たちが、将来、それを自分の生業とするという

可能性はほぼありえない、というわけで、気持ちの上で、比較的自由なところにいました。

学生時代に哲学やハイデガーについて勉強して、それがもとで大学に勤めていながら、実際にはそれと直結しているわけではない仕事をしているので、考えてみると違和感がないわけではありませんが、同時にある種の安心感が伴っているのも事実です。その辺りのことについて、少し話してみたいと思います。

## 1 公私の狭間で

おそらくドイツでも、あるいは他の国でも実態としてはさほど変わらないでしょうが、日本で、ハイデガーは主として大学で、あるいは何らかのかたちで大学に関わる者によって読まれています。出版などの分野には、ハイデガーについて読み続けている人もいるのかもしれませんが、これも広い意味で大学を支えてくれる分野と言え、その限りではハイデガーへの関心は、基本的に大学に係わっている人たちの中で、共有され交換されているのが現状です。その一方で、今の大学そのものの中でハイデガーを読む場、読んでいられる場所や可能性は次第に狭まりつつあります。とはいえ、もともとハイデガーは、実際のところ大学で、というより「大学界限」という、やや大学本来の公的な場から少し外れた場所、研究室の中や、大学に勤める者、大学に学ぶ者らの「私的」な場（カントならそれを「公的」と呼ぶかもしれない）でひっそり読まれ、時に大学の施設の中に場所を借りて、しかし、大学の通常の公的な催しから外れた私的（あるいは公的）な催しの中で公的に論じられてきました。これは何も今に始まったことではありません。

ここにいる人の多くは、私も含めて、主として哲学専攻の大学院に籍を置いたでしょうが、私たちは、つい、大学で哲学を学び、たとえ少し回り道をしても、結局、また大学の哲学関係のゼミで、ハイデガーを含む哲学者の書物を読んで学生と討論する、といった人生やその経歴を漠然とながら、哲学や哲学史研究の基本的なモデルと考えがちです。しかし、実際に、そういったモデルにそのまま該当する人は、この中でも意外に少なく、多くは本務の傍らで、本務に直接、影響を与えない範囲でハイデガーについて読み続け、夏休み中の週末のこういった場所で、つまり大学の施設なのだけれども、その主たる利用目的から若干、外れる形でそれを使わせてもらって、いろいろ自分の読み方や解釈を交換している、というのが実情ではないでしょうか。

大学というのは、公私の区別ということに関しては、よく分からないところで、何が公的で何が私的であるのか、いくらか曖昧な面があります。いわば農閑期には、専門の文献を読む、特に原書で読むというのは、半ば業務の一端として認知され、奨励される半面、農繁期になると、そういった作業は全くの穀潰しの道楽のように見られがちです。今、自分は、ハイデガーの重要な一節を読んでいて、何か分かってきたという気がするから、入学試験の監督には出られません、などというわけにはいかない。入試というのは、大学にとって、学生を得ると同時に収入源として重要な意味を持つ、農繁期の中でも文字通り「かき入れ時」ですが、それを前にすると、ハイデガーを読むなどというのは、ごくプライベ

一トな案件でしかなくなります。つまり、大学に教員として籍を置く人間にとって、外国語の専門文献を読むのは業務の内側と見なされても、主たる業務としては位置づけられていない、限りなく私的な営みとして理解されています。大学の運営の妨げにならないかぎり、読んだり、論じたりするのが許容される。総じて哲学の勉強や研究は、公的な業務の邪魔にならない範囲で大目に見てもらい、黙認してもらっている存在にすぎません。もちろん、大学で教員として採用されたり昇進したりする際には、そういったプライベートな場での研鑽を反映するものとしての論文が、審査の対象となります。主に、プライベートに何をしているか、によって勤務先で評価される、というのが時に不思議に思えたりします。少なくとも、一般の会社や職場では、勤務時間中の態度や成績が評価されます。勤務時間外のプライベートな時間に何をしていたかが、評価の主たる対象となる、というのは、大学やこれに類する研究機関以外では、あまりないのではないのでしょうか。いずれにせよ、ハイデガーに限らず、大学での研究、特に人文系の学問はもともと大学界隈の公私の狭間で行われている、そこでは、公的機関としての大学本来の業務に支障をきたさない、ということが暗黙の条件となっています。

研究者の自己理解はひとまず措くと、ハイデガーは、かつてドイツの文化や言語を知的に代表する同時代人として日本で受容されていました。総じて戦後の日本の中では、ドイツは、それまで持っていた知性の上での特権的な輝きを失っていきませんが、その中で、ハイデガーは戦後も、長く日本の中で積極的に受容された同時代のヨーロッパの哲学者でした。もちろん、ことハイデガーに関する限り、他の国々でもそれなりに重要な存在として認知されていたでしょうが、少なくとも、かつてはアメリカなどよりも日本でハイデガー研究のほうがずいぶん盛んだったように思います。むしろ、ドイツでは、日本人が、ハイデガーに示す強烈な関心が少し不可解なものとして受け取られていると感じたことが何度かあります。

おそらく、それは、第二次大戦後の世界が米ソ両大国を軸にかつての連合国によって切り分けられ、西側ではアメリカの文化やその価値観、そして当然、英語が席卷する中で、ヨーロッパの文化は、新興の騒々しい都会の大衆的な文明に対抗しうる繊細な文化という位置を担わされます。第一次大戦の開戦の際に、トーマス・マンは、英仏協商の「文明」に対して、ドイツ民族固有の「文化」という対概念を提起しました。文明と文化という日本で御馴染みの対概念は、この時、トーマス・マンがドイツ人の戦意高揚のために用いたある種のレトリックですが、本国では、その由来のせいか、この対立概念がほとんど語られなくなって以後も、日本ではこれが長く生き残ってきました。今でも、教養書や、小中高生向けの教科書や参考書の中に、これが何の断りもなく、実効性を持つ発想として紹介されているのを見かけることがままあります。おそらく、この対概念は、その由来はもとより、言葉や概念そのものとしても普段、必ずしも意識されないままに、戦後の日本の中に根を下ろし、暗黙の内に、われわれの発想を規定してきたのではないのでしょうか。ハイデガー自身が「文化」という言葉を嫌っていたにもかかわらず、ハイデガーは、日本では、英米の文明に対する、知的なヨーロッパ大陸固有の文化、とりわけドイツの精神文化を代表する存在として受け取られてきたと思います。意識的・無意識的に関わらず、ハイデガ

一は、日本と親和的なドイツのナショナルなものを、あるいは、戦後の英米圏の文化を基準にしたインターナショナルに対するローカルを、土着性一般を代表する役割を担わされてきたと言ってよいでしょう。

一方で、大学の中での教養科目や第二外国語という枠が、ドイツ文学、広くはヨーロッパ文化の受容を制度的に保障する一つの擁壁であり、実は、ハイデガーを読みうる私たちの場も、それに守られていたと言えます。明治維新前後の日本には、英米仏の国々が開国を迫ったこともあって、それらの国の影響が当初、圧倒的でした。いまだ統一ドイツが実現せず、アジア・アフリカの植民地獲得にドイツが乗り出していなかった時代です。ところが、間もなく普仏戦争が起こり、フランスはドイツに敗北します。岩倉具視を中心とする遣欧使節団が敗戦とパリ・コミュンで混乱するフランスを見限り、急遽、戦勝と統一、帝国の発足に沸くドイツに赴き、ベルリンでビスマルクに圧倒されたというのは有名です。日本の近代化にドイツが重要な役割を果たすことになるのは、これ以後のことでした。しかし、戦前の日本で、旧制高校や大学で、ドイツ語が教えられたといっても、数の上では、日本全体の中でのドイツ語履修者は少数です。

むしろ、戦後になって、新制大学が次々に生まれ、そこへアメリカの占領政策が、教養教育を求めたこと、それがきっかけで、文学部出身者が大学に大量に就職する機会に恵まれることとなります。私たちは、大学の教養教育の課程では、教員として各学部出身者が等分に配置されているとまでは考えていなくても、なんとなく学部の構成を反映する形でいろいろな学部出身者がいるのだろうとつい考えがちですが、そうではなく教養部というのは、ほとんどが文学部の出身者で占められていた組織です。どこの総合大学でも文学部は他学部 비해比較的小さな存在です。しかし、たとえばかつて教養部で必修とされていた人文系3科目、社会科学系3科目、自然科学系3科目、さらに英語と第二外国語それぞれが4科目で計8科目、それに体育、その大半が通常、文学部かそれに類する学部の出身者が担当する科目なのです。特に語学は全体の中で占める割合が高い上にクラス規模が小さいために、かなりの数の教員が必要です。大学全体の中で小さな所帯であるはずの文学部の出身者が、どの学部であるかに関係なく四年間の学部在籍期間の半分の期間の授業の担当をほとんど独占する、というのが、長く戦後日本の大学の実態であってきました。大学に研究者として就職する上で、文学部出身者は極めて有利な位置にいたのです。

もうひとつ、戦前の日本において、ドイツは、19世紀の後半から圧倒的な軍事力をつけて他のヨーロッパ諸国を威圧する存在として受け取られてきました。もちろん、医学や哲学、自然科学の偉大な学者を輩出した国として尊敬されていた、しかし、同時に好戦的で権威主義的な国家として、いわば権力の側にとってモデルとなるような国としての側面が強かったはずで、ナチズムと敗戦を経て、戦後、ドイツについての位置づけは微妙にずれてゆきます。先にも言いましたように、アメリカやソ連が戦後世界を規定する存在であるのに対して、ドイツやヨーロッパの文化は、それとは異質な深みをもったものとして捉えなおされるのです。そして、その中で、ナチズムにも関わったハイデガーは、日本では、その責任を問われるのではなく、むしろまさにドイツ的な精神のデモニッシュな側面を代表する存在として、ラディカルな妖しい魅力を持つものとして立ち現れてきました。そ

ここで、アメリカ型のプラグマティズムや薄っぺらな大衆消費文化に違和感を覚えながら、さりとしてマルクス主義にも馴染めず、ソ連型の社会主義の抑圧的な傾向に反発を覚える若者にとって、ハイデガーは、いわば非政治的なラディカリズムを提供するものとして歓迎された、と言えるのではないのでしょうか。ハイデガーがナチズムに加担したという事実が、日本では、アメリカやフランスにおいてほど大きなスキャンダルとしては受け取られていないのは、この辺りの事情も絡んでいると思われまます。

## 2 ハイデガーにおける「公共性の構造転換」

ところで、「公共性の構造転換」という言葉を表題の中に入れたのは、もちろんハーバーマスの初期の代表作のタイトルを拝借したのですが、ハイデガーと公共性を語るのに、これを借りたのは、常々、ハイデガーの『存在と時間』も、いわば「公共性の構造転換」という構造を備えていると考えてきたからです。ハーバーマスについて真剣に研究していられっしやる方には、不謹慎な表題かもしれませんが、ご容赦ください。

どういうことかと言いますと、『存在と時間』の既刊部、刊行されている部分、つまり全体構想を構成する三つの部分、還元・構築・解体、このうちのいわゆる「還元」の部分には、たしかに人間の在りようとしてまず「世界=内=存在」を取り出し、それをまず気遣い (Sorge)、ついでそれを時間性へ還元し、さらにそれが歴史性として具体化されるという展開を辿ります。還元というのは、何かある具体的で複雑な現象をどんどん形式化していった、その骨格をあぶりだしてゆくことですが、この過程は単に「客観的な分析」として提示されているわけではありません。現存在にとって、気がつけば自分が常にすでにそこにいてしまっている世界、それが開かれている様態、これをハイデガーは Öffentlichkeit、「公開性」、一般的な訳語を使えば「公共性」と呼びます。現存在は、常にすでにこの公共性の中にあって一定の役割を担って世間的な生を生きている。そういった世界の在り方は、当初、ニュートラルな形で分析されているかに見えるのですが、だんだん、それが頹落だ、平均的な凡人だ、公共性の中で話すのは単なるおしゃべりだ、という具合に否定的なニュアンスを帯び始めます。ハイデガーは、そこにあくまで価値判断は入っていないと言うのですが、どう考えても、何か怒られているような感じがする。現存在としては、なぜ怒られるのかよく分からないのだが、その現存在に、やがて良心の呼び声が襲いかかり、「お前は負い目を負っているのだぞ」と呼びかけられる。その声に促されるように、現存在は、死への先駆に駆り立てられる。簡単に言えば、死ぬのを先取りする形で決断する、それを通じて自分がかげがえのない存在であることを自覚して、あらためて今、自分のいる場に立ち返り、そこに作用する開示性を、先人たちから託された遺産として背負い受ける覚悟を決める。それは現存在が一個の運命となることであり、これによって同時にまた民族の共同体が歴史的に生起する、と言われます。

要するに、われわれが普段何気なく公共性の世界に生きている、これを、良心の呼び声を通じて、一旦、遮断して、ひとりの個人としての自分の在りように立ち返る。死を介し

て、自分はかけがえのない者だという自覚に目覚める。では、そのまま私的な世界に閉じこもり続けるのかと言えば、そうではない、あらためて公共性の世界に立ち返り、単なる上っ面の公共性から、その根底に作用する真の開示性を背負い受けるという段取りになっている。公共性とは、もともと、先人たちによって、ひとつのアレーティアとして開かれながら、それがいわば自明のものとして固定化してしまい、そこに備わる本来の異様さ、凄みのようなものが隠蔽されている。現存在は、その自明性から距離を取る。言わば一種の異化作用を介して、沈滞した日常の公共性もがらりと様変わりした相貌を呈し、アレーティアとして立ち現われてくる。公共性からいちど私的な世界へと引き下がり、そこからあらためて公共性に立ち返り、それがアレーティアとして背負い受けられ、清冽な民族共同体となって生成してくる、こういう段取りになっているのです。

つまり、『存在と時間』は、いわば、単に純粋に記述的に現存在を分析し形式化してゆくというのではなく、この分析の作業を通して、現存在が転換する過程として考えられています。もちろん、この二つの契機は渾然一体となっており、それが時に必ずしもうまく繋がらない、という印象を受けることもあります。文体としてはおおむね三人称現在形という、いわば無時間的な現在の中で展開する話として書かれていますが、むしろ一人称の現在完了形として私の体験談を語るのか、それとも、こうでありたいという未来形ででも書かれていれば、もっと納得しやすいかもしれません。いずれにせよ、このような意味で『存在と時間』とは、魂の転回のお話、公共性がアレーティアの開けとして顕現しつつ構造転換を果たす、「公共性の現象学」と言えるかと思います。

このように『存在と時間』では、本来の歴史性を通じて公共性が真のアレーティアへと転生してゆくわけですが、それは同時に現存在が一個の運命となり、民族共同体が生起する過程でもありました。つまり、ハイデガーにとって、公共性とは、現存在がいまだ自己と民族との一体性を実現していない状態なのであり、最終的にそれは共同体へと回収されるべきものであったわけです。

周知のようにハーバーマスの『公共性の構造転換』は、近世初期の啓蒙の時代のイギリスなどで、有産の教養市民が私的な利益を越えて「公共圏」というものを立ち上げていったが、フランス革命や19世紀における公私の境界の曖昧化という動きの中で、次第にそれが衰退してゆく過程を追跡しています。本来の公共性に代わって議会制などのような、むしろ形骸化された形でそれが受け継がれ、20世紀には、互いに平等な資格を持った者による自由な意見の交換などといったことはありえず、むしろ政党やメディアの発達によって、一見、民主的と見えながら、その実、多くの人間が直接には政治に関わらないシステムによって公共圏が代替されていく、というのです。

ハイデガーにとっても、公共性とは、公開の語り場であり、基本的に一切を支配し決定しうるような場として見られています。それを近代が追求すべき未完成のプロジェクトとして考えたハーバーマスとは対照的に、ハイデガーはそれを嘆かわしい空談の場と見なします。いささか図式的ではありますが、近代が神の死んだ時代、どこか上のほうで決定を下してくれる審級がなくなった時代、共同体の原理・原則が必ずしも自明でなくなってしまう時代であるなら、その時代の大きい欠如に耐えるものとして、その欠如から

要請される形で公共性が出現したと考えることもできるでしょう。その限りでは、ハイデガーにとってもハーバーマスにとっても、公共性とは一種の宙吊り状態、中途半端な未決着の場、その意味で *offen* ではあるが、中途半端に *offen* な場、その意味で *öffentlich* な場なのです。

人はそういった中途半端な公共性の中では、何らかの全体的な経験というものに触れることができません。やや意地悪い見方をすれば、ハイデガーの言う死への先駆とは、擬似的な形で全体的でありたいという欲求が充足される機会だと言えるでしょう。この方向で読む限り、運命となって共同体と一体化する、というのは、そういった宙吊りの薄明としての公共性に終止符を打とうとする行いにほかなりません。

ハイデガーが考えた共同体、民族がはたしてドイツというナショナルなものであったかは、断定できません。少なくともそれまでのハイデガーの思索にはそういった民族的、排外的なものを感じさせるものはほとんど見当たりません。むしろ批判的な対決を通して背負い受けられるべき歴史の文脈はヨーロッパ、ないしは西洋の知の伝統と考えられていました。実際、第一次世界大戦によってヨーロッパとアメリカの関係は劇的に逆転し、戦中に出現したソ連や新興国日本に対する警戒感を含め、ヨーロッパが脅威に晒されているという危機感は、ハイデガーに限らず当時の多くのヨーロッパの知識人が共有していたものでした。ハイデガーが、第一次大戦後、一時期、シュペングラーの『西洋の没落』に取り組んだことはよく知られています。また、この時代に、ヴァレリー、シェーラー、クーデンホーフといった人たちによって、ヨーロッパをひとつの歴史共同体として捉え、それを実際の政治的な統合に結び付けようとする機運も出てきて、これが少なくとも理念的には現在の EU にも繋がっていきます。ハイデガーにおいて目指されていたものも、それが偏狭なナチズム的世界観に直結するものではないにしても、公共性から逃れ出た先に、あるいは公共性が転換を果たした先に見えてくると考えられていたのは、自分とそれとが一体であると感じうる熱い共同体でした。それは、ドイツの民族共同体かもしれないが、ことによると、ヨーロッパ共同体、あるいは西洋という共同体かもしれない。あるいは、ことによると、それまでの既存の文脈から独立した無色透明の共同体かもしれない。ただ、当時、勃興しつつあったアメリカや、あるいはアメリカと共に西洋を挟撃しようとするソ連を含むようなものでなかったのは間違いありません。

### 3 現実の公共性の構造転換の中で

さて、先にも言いましたように、従来、私たちが、日本でハイデガーを読み、それについて論じる場合、そこでは暗黙の内に、両大戦を通じ、あるいは戦後になっても、かつての連合国側の主導によって形成された世界秩序に対する違和感が投影されていたのではないかと私は考えています。日本の大学、とりわけ国立大学の中での、ドイツ語やドイツ文化が占めていた特権的な位置の中で、ハイデガーはほとんど唯一の生けるドイツ精神の化身として、戦後の大学界隈の公共圏と私的空間の狭間を生き延びてきた、と言えるでし

よう。おそらくハイデガーが考えたのとは少し違った形で、私たちは彼とのあいだに成立するであろう、やはり一個の共同体を望み見ていたのです。

しかし、戦後といってもすでに終戦から63年の月日が過ぎています。ハイデガーが亡くなったのが戦後から31年後の76年、それからすでに32年の歳月が過ぎました。つまり、この戦後の時間の中で、ハイデガーが生きていた期間より、死んでからの時間のほうが長くなったのです。その間の大きな変化は、私たちがハイデガーを読むことの間に変化を与えずにはおれませんでした。なんとと言っても、80年代末から90年代初頭にかけて、それまでの冷戦構造が崩壊しました。

そして、ハイデガーの2世紀目に入り、昭和が終わったこの89年は、また同時にフランス革命二百年に当たる年でもあったわけですが、まさに大変な激動の年で、ハイデガーの命日に当たる5月26日から9日後、6月4日に中国で天安門事件が起こり、秋からいっせいに、東欧の社会主義体制が崩壊していく、ベルリンの壁が開かれ、最後はルーマニアのチャウチェスク大統領夫妻が銃殺されるというという、波乱に満ちた年でした。しかし、それはよく言われるように単純に資本主義体制が勝利したということではありませんでした。たしかに翌90年から91年、ドイツの統一で世界が沸いた一方で、ソ連が崩壊してゆきますが、日本では、ちょうど、バブル経済が最後の頂点に達した後、それが破綻し、戦後の西側諸国の60年代から続いた右肩上がりの経済成長の時代が終焉を迎えます。東西冷戦の終焉は、西側陣営に位置していた日本にとっても、あらためて平和と繁栄をもたらしたのではなく、東西冷戦の中で、ドイツと共に軍事的な禁欲の中で経済に自らのエネルギーを傾注することで、他の西側先進国を凌駕する経済成長を成し遂げてきた、日本の微妙な立ち位置が困難になり、やがて「失われた十年」と呼ばれる時期に突入していきます。

しかし、それはまた、戦後日本のハイデガー受容の土壌をも変化させていきました。東西冷戦の中で、ドイツの精神と文化を伝える存在として、戦前・戦中の日独軸を戦後になって屈折したかたちで体現していた、共感を伴ってハイデガーを受容するという枠組みが崩れていくことを意味していたからです。フランスやアメリカのハイデガー文献が積極的に日本で紹介されるようになるのは、これ以後のことだと思います。

そして、冷戦構造や戦後の世界秩序の崩壊に歩調を合わせるかのように、92年に大学設置基準の大綱化という中で、全国の大学は一斉に教養課程を改組、解体に踏み切り、教養科目の削減や第二外国語の必修が撤廃されてゆきます。本来、哲学や思想の研究とは直接には特に関係のないはずの大きなうねりが押し寄せてきました。実際、少なくとも大学で就職の機会を求める若い研究者にとって、これは、ベルリンの壁の崩壊以上に衝撃的な、大学アカデミズムの擁壁の崩壊を意味しました。大学のカリキュラム制度によって辛うじて支えられていた哲学研究の経済的基盤が崩れたと言ってよいと思います。

そして、冷戦の枠組みの崩壊とインターネットの普及によって生じたグローバル化と呼ばれる大きなうねりの中、第二外国語の中のドイツ語やフランス語の位置も急速に低下していきます。辛うじて残っている枠も中国語や朝鮮語によって圧倒されていきます。環境や南北格差といった問題が浮上して以後、ヨーロッパ、とりわけドイツは、もはやアメリカやソ連に対抗しうる特別な存在ではなくなっていくと思います。せいぜい環境先進国というイ



メージでその命脈を保つに過ぎません。グローバル化の動きに対する有力な対抗軸として、日本の若者たちはヨーロッパ文化に期待していません。第二外国語も、しいて学ぶとすれば、むしろそういったグローバル化の流れにうまく乗るためのツールとしての可能性が求められています。アメリカ的な物質文明、あるいはマルクス主義に対抗する精神の文化としてのドイツ思想、とりわけハイデガーという知的なラディカリズムという位置づけが、急速に意味を失っていったのだと思います。

現代世界の地政学的な構図について語られる際には、何よりも西洋とイスラム世界の対立軸が前面に出てきて、ハイデガーの介入する余地が乏しくなりました。ハイデガーの描く西洋存在論の歴史の構図では、それがあくまで存在忘却とニヒリズムの長い過程というひとつの閉じた筋書きであることが強調され、中世の時代に古代ギリシャの哲学が実はイスラム教圏で維持されていたという事実がごっそり抜け落ちていますが、それがこんなところでしっぺ返しを食らうこととなります。せいぜい、ハイデガーも文化の多元性と相互の尊重を説いた人だというマイルドな形で、しかも大して重要でもなく、性格造形も乏しい端役として登場するくらいです。

一方で、グローバル化の時代には、その動きに対抗して、民族的なものへの回帰が実に生々しいかたちで表面化し、地域や民族の自己主張が強まりました。そして、かつて多くの知識人が構想したヨーロッパの共同体が実際に形となってきた今、その連帯の輪から外れている日本人としては、西洋の閉鎖的完結を説くハイデガーに一方的に共同性を夢想することは容易にできなくなっています。冷戦が終了した今、アングロサクソンの公共性に対する違和感をハイデガーに託すという、われわれのそれまでの流儀は有効ではなくなりました。

また、ごく常識的な意味でわれわれを包みこむ公共性は急速に変わってきました。やはり、冷戦下で構想されたインターネットは、冷戦が終結したあとに爆発的に普及し、われわれの生活に大きな影響を与えています。今日、公共性という概念について考えようとする場合、インターネットの中の様々な言説の交錯を抜きにして議論することはできません。ハーバーマスが論じたのとはずいぶん異なる新たな「公共性の構造転換」を含む、現実のこのような種々の変革の中で、ハイデガー的な「公共性の構造転換」の果てにアレーティアとしての共同性を立ち上げるという構図は、本来、それが期していたはずの全体的な見通しを与えにくくなっています。

考えてみれば、ハーバーマスも、彼のあの初期の代表作で企図したのは、啓蒙の時代のみずみずしい公共性の姿を想起することによって、その精神の回復を期すことだったと言えるでしょう。この批判性に関する限り、案外、薄明の公共性を真の共同性に向けて転換させようとしたハイデガーの企図とは、さほど遠くかけ離れたものでなかったのかもしれませんが。真の公共性のアイデアを想起するにせよ、頹落した公共性をそのアレーティアの発露へと転換するにせよ、そのいずれの戦略も、今日の錯綜した公共性の実態の前に企図しにくくなっています。しかし、それ以上に困難になっているのは、東西に分断された戦後世界の中、大学界限の公私の狭間でハイデガーを読むということに、自らが安住できるニッチを巧みに見いだしてきた私たちの術策なのかもしれません。

Tamaki TAKADA

***Was heißt heute Heidegger zu lesen?***

— *in der ständigen Strukturwandel der Öffentlichkeit*